

新しい人権論へ

伊 田 広 行

(要旨)

人権問題は様々な形で議論されてきたが、その枠組みの拡大が求められている。本稿は、古い啓発主義的アプローチをのりこえて、多様性、エンパワメント、「スピリチュアル・シングル主義」の視点を豊富化する中で、新しい人権概念を提起する。また、「孤独論」とからめて、人間の成長の4段階説を提起し、シングル単位論を人権論として豊富化する。

キーワード：多様性、エンパワメント、＜スピリチュアル・シングル主義＞

はじめに

拙稿「スピリチュアル・シングル——生き方と社会運動の新しい原理を求めて」(拙稿 [1999])で、＜スピリチュアリティ＞概念を提起したが、本稿では、もう少し違った角度から、人権論および孤独論との絡みで、＜スピリチュアリティ＞および＜スピリチュアル・シングル主義＞視点がどう生かされるかを考えてみたいとおもう。

Ⅰ エンパワメント、多様性、＜スピリチュアル・シングル主義＞

Ⅰ-1 啓発主義アプローチのみなおし

外から批判する人権論の見直し

僕は、これまでの部落解放運動や障害者解放運動、女性解放運動、労働運動といった広義の人権運動のいいところを評価する立場をとる。だが、すべてよかったわけでもなければ、これからの運動を考えると十分というわけでもないのは明らかだ。だ

から、前向きに何が足りないか、どう変えていくべきかを主眼にするという意味で、批判的に以下は記述していく。

まず、日本で「人権」が語られるとき、一番多いのが「人間が生まれながらにしてもっている権利」などと抽象的に捉えるだけで、具体的に今の日本で人権侵害されたときに個人としてどう闘うかというように具体的には捉えていないということがある。「差別に繋がる制度や法律を具体的に変える」というより、「制度はもう差別的でないけど人の心の中にまだ古い意識が残っている」「だからみんながもっと啓発され、思いやりをもちましょう」という観念的な人権アプローチのままだということだ。これは、それを語る「先生や親やメディアや政治家」が、自分が加害者であるとか被害者であるとか突き詰めていないということに関わる。これがまず、人権論を語るときの入り口の問題だ。だが、この問題の奥はもっと深い。それは、外から正義の側に立って批判するという人権論のもつ問題だ。

被差別者が差別する側を批判したり糾弾したりすることはこれまでもこれからも必要かつ有効な一手段だと思う。だが、「自分が差別される側だ、弱者だ、傷ついている」という面ばかり強調し、「あなたは差別者だ、加害者だ、反省しろ、ひれ伏せ」というよう^{かたくな}頑なな一方的態度（一面的断罪）をとるのは、「被差別者」「弱者」を常に自動的に優位に立たせ、「差別側」に何も言わせなくするという危険な構図となる。その一面性に自覚的であるべきだ。

それと類似したものであるが、「いつも悪いのは権力側だ」として、自分たちを一般庶民ゆえにいつも犠牲者だと決めつける構図も問題だろう。確かに権力を批判する健全さは必要だが、それが自分たち内部の問題を見ない口実になってはいけないだろう。また自分が「いいこと・正しいこと」をいっていると思い、悦に入っているはいけない。敵を非難し、社会運動したり闘わない軟弱な市民を内心見下し、しかし味方につけるために啓蒙するというエリートの・教師的・政治家的・官僚的・前衛党的姿勢ではだめだ。「自分に落ち度はない、自分は頑張っている」というかたくなな姿勢や、偉そうに、威圧的に、相手を強く非難するような姿勢も「闘いだから当然だ（熱心だからこそ怒りを強く出す）」として一部に見受けられるが、それもダメだ。だがほとんどの活動家、指導者、話し手、講演者、教育者、宗教者は、そうした面もっていた（無自覚の場合でも）。そこを考え直すことが切実だ。

それと類似した、「みんなは気づいていないだろうが、社会にはこんな問題や矛盾

がある（あなたは抑圧・差別されている）」とし、「これがあなたにとっての真の解放だ（早く気づきなさい）」と押し付けるのもダメだ。どうすべきかを安易な一般論（民主的にとか、考えろとか、政治や教育や経済変化依存＝変化必然論や小手先分析への流し込み）で教えるようなものも、ダメだ。自分の矛盾や加害者性を棚上げしたり、自分の責任や関わりを抜きにした客観主義かつ啓蒙主義的なことの欺まん性に僕らは辟易している。

さらに「かわいそう」「よくないこと」というような、自分と切り離れた姿勢（上からの同情、自分から切断した一般的捉え方）でもだめだろう。差別はよくないなんて、小学生でも保守政治家でも言う。つまり誰でも言えることなんて意味がない。インパクトがない。「法律で定められている（禁じられている）から差別や偏見はダメ」というのも、そうした法律があることで社会（企業や個人）が変わっていくから、制度としては確かに必要であるが、そうした外側からの押し付けにはやはり欠点があり、必要十分ではない。

禁止でなく内面からの反差別

つまり、僕らがめざす差別のない社会は、禁止、罰則、道徳、非難、批判、糾弾、恫喝、啓発、指導、同情といった外側からの力によって押さえつけて差別を見えなくすることでなく、社会を構成する個々人がその内面から差別を欲しなくすることだ。差別者・抑圧者のように自分が力をつけて、力づくで相手を黙らせることを求めているのではない。偉そうな態度をとっていること自体が人権感覚の欠如なのにそれがわかっていないようなことではダメだ。

そのためには、ひとりひとりが深い感情・ホンネ・実感のレベルで差別の痛みを知り、人と理解しあう、受容しあうという感覚を持てる人になり、当事者の声に謙虚に耳を傾け、人に優越したり人を抑圧するようなことをしなくてもすむような自分になるという個人の成長と解放が必要だろう。自分から切り離して物事を捉えるのでなく、自分が持っている権利を奪われてきた人々がいるということ、差別される側に与えられてこなかった特権を自分が持っていることに気づくことが、差別を他人事でなくさせる。そして自分も抑圧されているのだ、また同時に抑圧者でもあるという気づきにおのおのの人たちが至るような、繊細な社会になってこそ、差別がない社会になったといえる（この側面についてはエンパワメント概念と絡めて後述）。

全員がそうなるなんていうのは永久にこない理想状態だろうが、そういう人が増えるというのが目指す方向だ。人権を本当に尊重しようとするなら、自分が人権を尊重している人間だという思いを捨て去らねばならない。自分のなかにある差別性、弱さ、汚さ、見下し、優越感、優生思想、能力主義をみつめ、相手を批判するときにも相手の多面性（いいところもある普通の人の面）を忘れないかわり方がいるとおもう。自分のきれいごとをみつめ、自分に刻印された差別性に気づき、自分の権力性を常に自覚するような人が、ホンネでどこまでなら言えるかという突き詰めの本モノさを見せることこそが信じられる。それはスピリチュアルな感覚で臨むということだ。

「被差別者・被害者 VS 差別者・加害者」の構図で自分を被害者の側において「自信満々で語る」のは、そのときにはラクで、同情・慰めを得たり「勢い」をもてるが、その構図（運動）の外では自分のアイデンティティや勢いをなくすだろう。「差別されている自分」「差別と闘っている自分」というアイデンティティだけに寄り添うのは、論理的には差別がなくなるとアイデンティティ（居場所）がなくなることになり、事実上差別の温存を求めることになる。そしてもちろん、そんなことを求めているのではないはずだ。

森田ゆり氏は、そういう視点を次のようにまとめる（森田ゆり [2000]）。すなわち、差別問題に本当に向かい合うためには、深い感情レベルの痛みを分かち合い、知性だけでなく感情レベルでの和解の経験が必要である。誰も人を変えることはできないのだから、相手の偏見や思い込みを揺さぶり、そうしたものに囚われていたことに気づき（脱学習）、新しい知識と考え方の選択肢を提示することこそが必要であると。

こうした視点こそが、新しい人権運動をすすめるであろう。価値の体系である文化¹⁾そのものの創造（新しい水準の人間を作る、文化価値を作る）をめざす運動こそが、多数派の賛同を得る道であり、未来社会の雛型をつくる、今日、ここからの第一歩の実践となる。

行動しないのは、知らないからか

これまでの社会運動は、ともすれば、無関心と無知が原因とし、啓蒙（教育）すれ

1) 文化とは特定社会の成員間で共有、学習、伝達される価値体系、行動様式、制度などの複合的な全体である。それは人が世界を解釈し、意味づけ、反応するためのフレームワークであると、森田ゆり氏は言う。森田 [2000] p 30

ば人々は行動するはずと考えるスタイルになりがちだった。一種の前衛党主義だ。そしてそういう発想と結びついて、大衆のために政治家や専門家が社会の仕組みを代行的に作り上げる（一人ひとりが社会を変えていくのではなく、専門家任せ）というスタイルが横行してきた。

だがジョアンナ・メイシーや彼女に影響を受けた中野民夫氏など、ワークショップ運動の視点をもつ人々はいく（中野民夫 [2001]）。知識だけでは人は動けない。無関心というより、平穏な暮らしの裏に潜む絶望に直面する恐怖から、無気力が生まれている。自分ひとりでは変わらない、生活を変えるようなことは知りたくないという無意識がある、と。だから、知識伝達や解決策提示、啓蒙活動だけでは必ずしも人々の行動にはつながらない。もぐらたたきのような対症療法も限界がある。とするなら、一般論を「知る」だけではだめで、体や心の深い部分で「感じる」ことが、関心呼び起こし、理解、行動へとつながるのだと。

情報（事実）を伝えるという教育・宣伝さえすればいいのではなく、僕たちには真実を知ってしんどくなることへの恐れがある。自分の心の無意識をみて、自分の生き方と絡めて、心の底から感じる必要があるというのだ。つまりここでも、人間の深い内面——スピリチュアルなレベル——からの変革が指摘されている。制度改革も必要だが、一人ひとりがその自分の内面の感性から変わっていくことを目指す運動（そうした質の「教育」）が、遠いようではあるが、本当に人権問題の解決を求めるには今から必要なのだ。

1-2 <たましい>で相手をみる

多様性という理解

人権論として、もうひとつ押さえておかなければならないことが、「多様性」と「エンパワメント」概念の理解が日本ではひどすぎるという点だ。この両方を正しく豊富に理解することこそ、僕の言う<スピ・シン主義>に至る道だ。両者は関連しあっているがまず前者から考えていこう²⁾。

多様性・個性の尊重という言葉は日本に溢れているが、アメリカなどの人権擁護運

2) 多様性およびエンパワメント概念については、森田ゆり氏の各著作から多くを学んだ。ここではそれらをベースにしつつ、僕なりの考えを入れてまとめている。

動で大事にされているこの概念の真髓がほとんど理解されていない。「多様性」(diversity)とは、「多文化主義」「文化多元主義」とも呼ばれるもので、人種や民族の違いにとどまらず、ジェンダー、性的指向、障害の有無・程度、年齢、宗教、家族形態、さらには個人差などあらゆる「違い」をも視野にいたった広い概念である。

黒人を白人扱いしてやるよ、在日朝鮮人を日本人扱いしてやるよ、障害者なのに頑張っているね、女性なのに男以上に頑張っているねというような、「秩序上位グループへの同化・同一化・融合・共同体化」「皆同じだね」は決して人権を認めていることではないと考えるものである。つまり、「民族や会社や仲間などといった集団を共同体とみて、それらを同質とみなす(さらなる個の違いを重視しない)ことで幸せになる」ということに疑問をもつ考え方である。個・主体・特性・その人らしさというようなことが各人にとって、個々の違いがそのまま尊重され存続し、それらが共存することが「多様性」である³⁾。

だが、多様性・個性の尊重などといいながら、効率性と生産性を優先し、違いを排除して同一性を要求し強制する社会である日本、同調圧力が強く、個人というしっかりしたものが確立していない日本では、共同体主義・管理主義への批判性が弱く、その「多様性・個性の尊重」はほとんど空文句となっている。多様性概念と反対であるはずの、「同一化・画一化、上位グループへ仲間入りさせてもらうよう頑張ること、調和を乱さないよう自分のわがままを殺すこと、横並び(みんないっしょに)、人並み(みんな平等)、流行追随、多様性を認めない排他性」と共存するようなものとなっている。

また、しばしば混乱のなかで間違っ理解されているのは、「違いの尊重・他者性の尊重」という概念である。本来「多様性」の正しい意味で使われるべき「違いの尊重」概念が、「排除の正当化」と「グループ内同質化」の意味で使って平気な人が多い。

3) 多様性は重要な概念であるが、森田ゆり氏はその限界も指摘する。つまり「社会的弱者」と呼ばれるが、弱い人だから弱者なのでなく、社会的力関係の中でより弱い立場に立たされ、参加決定する権利や力を奪われているがゆえに「弱者」なのである。こうした差別の背後に隠れている構造的権力関係が、「差別 VS 被差別」の図式に立つときは見えやすいが、多様性アプローチでは背後に隠れやすいので、注意が必要であると。森田 [2000] p 16

例えば、「男女の異質性をお互い尊重しよう」「男女は相互に理解できない相互他者性がある」という言い方がなされることがあるが、これは一見、相手の他者性を理解しているように見受けられるが、では同性内には他者性はないのかということを見問していない鈍感さが隠れている⁴⁾。同性内にも他者性があるときに、あえて「男女の間には理解できない他者性」があるというのは何故なのか。同性間の違いと異性間の違いに、本質的な違いがあるのか。僕は、男女の区分において絶対的本質的な差異を認めない「平等派（普遍派）」（社会構築主義）の立場をとって「シングル単位論」を展開しているので、上記のような、身体と生殖をもとにした、男と女の絶対的区分にこだわる見解（無意識のうちに同性内の同質性を信認している見解、本質主義）に賛成できない（ジェンダー概念の理解の差）。この意味で、差異は、グループ間に重点を置くよりも、まず個人間に重点を置くことが大切である。そうした「多様な共同幻想」の解体の文脈でこそ、真の「他者性の尊重」ということがいえる。

つまり「男と女の違いの尊重」「日本人と朝鮮人の違いの尊重」という考え方は、「男というグループ内は同質」「日本人というグループ内は同質」という前提を有しており、その上で、「尊重」という美辞麗句を用いながらも実は、だから「自分たちとは違う」と相手を排除し無関心になることを内包している場合があるのに、そのことに無頓着であるという問題だ。そもそも男女という二分法自体に絶対的境界線がないという無理があり、男という集団内には無数の個性があり、そこを大事にみていくというのが多様性の視点である。だが、大雑把な「違いの尊重」概念の利用には、そうしたさらなる下位グループへの、そして究極には最終単位である個人への無限の

4) 花崎 [1996] はいい本であるが、ジェンダー関連の理解においてしばしばこうした近代主義的な限界を呈しており、その点は賛成できない。この「男女間の他者性」(113ページ)以外にも、例えば、男女間の関係を「契約性」で理解する(118-9ページ)がこれも古い。信義を前提とするといって、相手をしばっていること(隠れた権力制)にあまりにも無自覚である。男女を「対の性」と把握(134-5ページ)することもおかしい。同性愛関係を、友愛友人関係として、性愛=男女関係と切り離すという間違いを犯している。その他、104, 131, 138, 3章ケアの論理の特権化、など、ジェンダー理解における間違いがある。いつまで、身体と生殖をもとにした、男と女の絶対的区分にこだわっているのだろうか。もちろんこの点に関して論争・対立があることを承知の上で、僕はこのように判断している。差異派の立場からは反論もあろう。このフェミニズムの戦略に関わるジェンダー概念の理解についてはここではこれ以上触れない。僕の立場については、拙著 [98a] [98b] [95] などに展開している。

「多様性概念の広がり」が繊細に意識されていない⁵⁾。

つまり、多様性とは、そうしたあらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく概念なのだ。他と違う「個」が、様々なレベルで同調圧力につぶされずに、「個」として尊重されサバイバルできるように、現実的に抵抗し主張し自己決定できる力をもつようにならなければならない。グループ化されひとかたまり扱いされる「共同体の力」から離脱する主体にならなければならない。つまりここで僕が理解する「多様性の尊重」概念とは、僕がシングル単位論で主張していたこととほとんど同じである。

「エンパワメント」概念の誤った理解と「奪われている」現状

さらに多様性概念は、エンパワメントの深い理解と結びつけて考えなくてはならない。エンパワメントとは、「パワーをもつこと」という理解から、女性など「社会的弱者」が能力や自信をつけて成功し自立することのように理解されることが多い。だがそれでは能力主義社会で競争に勝つための努力や頑張りを求めるという理解になり、本来のエンパワメント概念とは正反対のものになってしまう。エリート意識、強者の論理、排他主義、優生思想を残し、優越感と劣等感の秩序はそのままである。否定のパワーに囚われたままである。

正しいエンパワメントの理解は、逆である。現状を、人と人が分断され、疎外され、「生きる力」が奪われている状況(=ノン・エンパワメント状況)とみる。人は、世間の評価にとらわれ、自分の内より外に価値を置き、「自分を肯定する力」「自立する力」「生きる力」を奪われ、正しい知識なく、孤立し競争に追い立てられている。欲望・願望は、財産・モノ・名誉・地位をえて人から「上位」にみられること、世間という「幸せモデル」に近づくことというように、自分の外にあるものを追い求めるものとなっている。関心あるのはせいぜい自分とわが家族、自分の会社や友人だけというように、「狭い自己認識」となっている。人からどうみられるか、排除されないかということをととも強く意識して、人に警戒感を与えないよう、表面的なかかわりをするというように縮こまっている。目立ちすぎるのも、暗くておとなしすぎるのも、

5) 逆にいうと、その点が意識されているときには、あるグループをひとかたまりに捉えて構造的なグループ間格差(差別)を論じることには意味がある。

排除されることに繋がるので、自分の本音を隠して集団の雰囲気と同調している。

世間の秩序ランクづけの中で、自分はダメだ、うまくいかないのは自分の責任だ、努力が足りない、能力がないと、自分の力と可能性を限定して捉えている。「あるがままであること」より「あるべき自分」「成長、生産、効率などが大事」という価値観へ強迫的に追い詰められてきている。人々は「統治・管理する対象」として力を奪われ、考える力を奪われ、依存的存在にされている。そうした結果、恐怖感、不安感、無力感を持ち、深い部分での「期待、希望、理想」「安全、自信、自由」といった肯定的なものを見失い、これしかない、仕方がないと選択肢が見えなくなり、目先のことだけに飛びついて一喜一憂している。ときには競争に勝って、「下位」のものを見下し、優越感に浸ることでこそ「自信や元気」をもてるというようになっていく。

そうになっているのは、小さいときから成長していく中で、親や教師（学校、試験）やともだちやメディアなどから、比較され、おまえは世間のランクの中ではこの程度だ、この上下優劣秩序が唯一の基準だと繰り返し教えられていくからである。命令口調・否定口調で育てられるからである⁶⁾（肯定形で育てられない）。差別され、いじめを受け、暴力を受け、偏見を受け、個性を^{おとし}貶められるというように、さまざまな外からの抑圧を経験するからである。競争に勝ったり、可愛かったりするとほめられるからである。知識を一方向的に押し付けられ、考えることを尊重されないからである。

正しい「エンパワメント」概念の理解

とするなら、人権論としてのエンパワメントとは、そうした比較・競争の中で否定的に自分を捉えてしまったり、人に勝って優越感をもつという状況から脱し、そんなものをふっとばして、比較や勝利や優越心なく、「自分をそのまま肯定し好きになる、自分のちからと尊厳を取り戻す」というように理解されなくてはならない。つまり自分の大切さ、かけがえのなさを信じていることができる力、セルフエスティーム、自己尊重の感覚をもつことこそが必要なのだ。そして、個人の頑張りだけをその本人に求めるのでないのだから、本来もっている力をその人が取り戻せるように、社会・周りの

6) 親や先生からよく言われることは、「早く起きなさい、早く風呂に入りなさい、食べなさい、片付けなさい、勉強しなさい、並びなさい」といった命令形、「きたないからさわっちゃダメ、走っちゃダメ、喧嘩しちゃダメ」という否定形である。そういった言葉は、からだ全体で否定的なエネルギーを出しながら発せられている。

人がその人を援助すること（指導でなく）を含めてエンパワメント概念は理解されなくてはならない。肯定形で育てられ、自分でも自己尊重し、想像力を高めるように生育されなくてはならない。

これは、現存秩序の競争秩序と対抗的な視点であり、自分の内側の深いところから人権を捉えるものであり、かつそれが社会全体のつながりの中で個人の力を取り戻す（お互い繋がりあい関係しあった「広義の自己」認識）という視点であるという意味で、スピリチュアルな考え方である。近代社会の優劣秩序に勝って満足するというように自分の外部に自分の幸せの根拠を求めるのではなく、自分や他者それぞれの内側にすでにある力——生命力の源ともいべき混沌の闇世界、とくにその中のくたましい>という内的資源——に気づき、それをそのまま素晴らしいとみる感覚なのだ。外の価値観から離れ、自分のなかに自分が作り出す・見出すことで、自分が幸せに生きられるというような、ポジティブなあり方（希望というもののあり方）が、エンパワメントである。

自分を傷つけるものに適切に対処する力を持ち、安全、自信、自由、選択力をもつ。他者との関係においても、自分をくたましい>レベルで肯定できるから、差別したり優越するという否定的パワーで自己確認する必要がない。他者とは奪い合いや競争ではなく、くたましい>で関わるのであり、適度な距離を保ちながら共感・受容しあい、相手の能力を伸ばし、横に寄り添える。

これは言い換えれば、人権を「食えない、家がない、仕事を奪われる、医療を受けられない」といった生理的なニーズ侵害や、「蔑視される、差別される」といった精神的社会的侵害で捉える（マイナス回復の人権視点）だけでなく、もっと積極的に高い水準を基準にして、自己肯定できる状況にないこと、エンパワメント状況にないことにおいても、人権侵害と捉える視点（プラス獲得の人権視点）である。

こころの奥底からの満足がない、やる気がない、生きる気力がわかない、楽しくない、ピチピチ生き生きと生きられない、自信がもてない、くたましい>の素晴らしいさが感じられないというようなことが、人権侵害の表れなのだ。人間が、ボディ（肉体）、マインド（知性）、エモーション（感情）、スピリット（霊性、くたましい>）の4側面から成り立っているとすれば、エンパワメント視点の人権概念は、その4側面トータルを対象として、元気になることを目指すのである。

スピリチュアルなコミュニケーションの重要性

そうした視点で人権擁護を今、ここから実践していくことが重要であり、そのためには、一般論や従来の運動方法だけでなく、スピリチュアルなコミュニケーションの能力を高めなければならない⁷⁾。

「対立」は、異なる他者が存在するときには起こるもので、対立があること自体は悪くなく、むしろそこから新たな創造が可能となる契機だ。それを創造につなげるためには、「あなたは……だ」と非難するのではなく、「私」を主語にして、自分の気持ちに気づき、それを言葉にして「私はこう感じている」と相手に伝え⁸⁾、相手に対してどのような感情があるか、どうしてほしいのかを伝えあい、理解しあうという、当事者どうしの直接の聴きあう繊細なコミュニケーションが、多様性という異質なものの共存のためには必要だ。誰か上位者に審判者になってもらうという依存主義でなく、また「市場原理主義や小泉内閣が悪い」といった安易な回答を与えてもらって満足するのでなく、自分たちでその場で対話してそこに隠されていた問題を解決していくことができる能力をもつことが重要だ。

ところで、コミュニケーションにおいて、言語以外に、声の大小、調子、視線、表情、姿勢、ジェスチャー、ファッション、持ち物、環境などの非言語もある。話す側も聞く側も、そうした非言語も含めて話し、聴くことができるのだが、ここで「聴く」とは、単に「聞く」のではなく、能動的（目を見て心をこめて聴く）、かつ共感的（相手の気持ちを認める）、かつ反復的（相手の言葉を反復確認）に聴くということであり、そのためには<たましい>という水準が感じれていることが有効だ。

相手の権利を尊重しつつ、自分の権利も尊重するスキルが大事とする「アサーティブ」の発想も、単なる会話術ではなく、攻撃的態度（相手を傷つけ、反感を買い理解を得られない）でも、受動的態度（言われるがまま、我慢）にもならないようにしていく、実践の方法論だ。

7) 互いを理解しあおうとする積極的なコミュニケーションのための、認識と知識と技術すなわち「多様性トレーニング」が必要として、森田ゆり氏はその具体的実践トレーニングを編み出し実践してきた。そこに彼女の積極性がある。

8) この「アイ・メッセージ」は、カール・ロジャースの初期の教え子、トマス・ゴードンが「親業」「教師業」を考える中で開発したコミュニケーション技法であり、それがあちこちに広がったものである。

そこで大事にされる権利とは、自分の身体と感情と考えを大事にする権利、他人から尊重される権利、怒り、悲しみ、不安などマイナスの感情を表す権利、行動の優先順位を決める権利、要求をする権利と拒否する権利、考えを途中で変える権利、自分で考え、気持ちを言葉で伝える権利、相手の問題を自分の問題としなくてもいい権利、相手と距離をもつ権利（境界線を引く権利）、アサーティブに行動しないことを選ぶ権利などである（森田ゆりさんのまとめ）。傲慢に指導するのではなく、ここまで相手の権利を認めるという環境こそが、人を自立したひとりの主体（シングル単位人間）にするだろう。アサーティブである私には、同時に責任もある。それは、相手のアサーティブである権利を理解する、自分の選んだ行動の結果を引き受ける、自分の感情に責任をもつ、といったことであり、多様性・共存の作法だ。

相手が年下・子どもであろうと、女性であろうと、教育歴のない人であろうと、「自分からみてダメな人」であろうと、相手のことを^{リスペクト}尊敬し、相手が言葉にしない声、無意識の声、自然界の声なき声などを含めてよく聴き、そして心の底から話し適切な質問をする事が大事である。他の人の話はさえぎらず、沈黙の時間を恐れず、時間をかけ、寄り添うようなスタイル。自分の（文化の）価値基準で、相手を判断したくなる傾向に自覚的になり、相手の視点にたってみることをいつも忘れないこと。繊細に、その場の権力を見出し、それをなくそうとすること。そういう人がいてこそ、僕たちは相互に安心して語りことができ、相手の声に耳を傾けられる。相互の〈たましい〉を聴きあえる。民主主義とか人権とは、こういう立ち振る舞いをする事なのだと思えて分かる。威圧的に話す人が、「人権」と言うときの白々しさと対極的である。

人権って、〈たましい〉で相手をみるということなんじゃないか

これは、相手の人を服を着た〈たましい〉とみるというような感覚である。「人間は平等、あらゆる生命が平等」＝「人権論」というのは、〈たましい〉が衣を着ているとみるような視点だったんじゃないか。

子どもをみて可愛いと思うとき、〈たましい〉が踊っていると思ったら分かりやすい。その感覚をある人は「子供の時間」と言い、僕は「樹木の時間」（拙著 [1997]）と呼び、鶴見俊輔さんは「神話的時間」と言った。樹木も人間の近代理性と違う時間で生きている。「指輪物語（ロード・オブ・ザ・リング）」とかファンタジーの世界ではそういう視点を入れている。子供はそういう世界に生きているから僕らは学ぶもの

がある。僕らはむしろ子供にならなアカン。それはスピリチュアルな身体性、くたましい>性みたいなものを取り戻す感性ということ。

個人の孤独というものを踏まえた上でのつながり（後述、孤独論の第3，第4段階）を獲得していくのが目標やろうと思う。そういう文脈で、家族関係、恋人関係、友人関係を求めている。人権派といわれる人々が、DVは駄目だセクハラは駄目だ、女性差別はだめだといっているのは実はそういうことを別の文脈で言っていたのだ。同じ人間なのに人が性暴力を受けて、心も身体もずたずたなのに、なぜその痛みを感じないのかということ。保守派が「金欲しさに言うとするわ」というのはくたましい>で聞いていないということ。人権擁護の主張は実はこういう簡単なことなんだ。

なぜ僕がこんなことを考えるかと言うと、人権というと「きれいごと」とされたり、「カタい人、頭が固まった人が左翼的なこと言うてる、怖いことを言うてる」とみなされ、若い人たちに全然ウケないという問題を考えるからだ。フェミニズムなどの社会運動というと、おっちゃん・おばさんらがギャーギャー言うてる、ダサイ運動とみられている。これをどうするか。

実際古い側面も残っている。例えば春闘とか労働組合とか。でも、本来労働運動というものも、スピリチュアルな精神で、同じ職場の仲間が何で差別されてるねん、という憤りに基づくものだったはず。今は同僚がリストラされようが、女性やパートの人が自分よりずっと低賃金で働いてたって何の心も動かさないような労組運動になってしまっているのが多い。そんな運動でいいのかと見直すのが、人権論。

だから、人権の運動、民主主義の運動というのをくたましい>とか「シングル単位」という言葉をもって、良質な部分があるということを伝え、それを武器にしたいという思いがある。学生さんにもそういうことをいうことで、どうなの、あなたはどうか考えるのと問い掛けている。

こうした水準で、自分たちの立ち振る舞い方を見直し、運動スタイルの目標を高く設定するならば、人権擁護運動、社会運動に未来はあるだろう。こうした観点からすると、これまでの近代主義的枠内であった教師も「左翼的社会運動スタイル」も限界をもっているものが多かったことは明らかである。怒りの声を出しているとき、「静かに相手のくたましい>を聴く耳」は働いていない。一般論から学び常套句的な一般論を語る人は多いが、目の前の人から学ぼうとする人、目の前にあるその瞬間の人間関係、その権力関係に敏感になろうとする人は少ない。目の前の今ここでの実践に、

未来社会の雛型を見い出したり、作り出そうとしたりする人は少ない。異なる価値観の人と共存し、その人たちと関わる中から学ぼうとする人は少ない。

1-3 人権論の鍵

「奪われている私」という理解

自分が差別される側だ、悪いのは向こうだという「一面的断罪」面だけの運動は、限界と危険性を伴うと先に述べた。その意味はここまでの考察を踏まえて深化する。すなわち、「自分が抑圧されている」ということの意味を、上記した「マイナスにされているという差別」の面だけでなく、「エンパワメントできていないという、プラスの足りなさ」——自分がスピリチュアルな人間になれていないということ——の面で捉えることが、差別・人権論に深みを与える。

人を抑圧できる人は、自分を深いレベルで尊重すること（および尊重されること）の快楽を学んでこなかったのだ⁹⁾。そう理解することで、たんなる差別者への非難ではなく、いかに差別を減らしていくかの展望——人が小さいときからスピリチュアルなレベルで自己肯定する経験を積むことが必要——がもてる。人と比べたり優越感や劣等感をもつのでなく、自分を深い部分で肯定できるようになっていない——くたましい>がみえていないようにされてきた——という意味で、自分はこの世の中で人権を侵害されてきたのだという理解。そしてそれは同時に自分もまた、他者に対して抑圧的な存在であるという自覚にいたる。僕は抑圧的でなかったか。自分のなかに世間の能力主義的な勝とうとする指向がなかったか。もちろんあった。かっこいいとか金持ちとか人からうらやましがられるということを目指す権威的なところがなかったか。もちろんあった。いい人であろうとして目を繊細に向けていなかったただけだ。差別者を非難するなら自分をも疑え。

そこに気づけば、皆が抑圧され、また抑圧していることがわかる。差別する側である私がそういう意味で「奪われている＝抑圧されている」ということがわかる。相手を差別者だと批判するときも、その相手の抑圧性を自分も持っている抑圧性と結び付けて共感的に深く捉えることができる。

9) 例えば、男は特権ももっているが、小さいころから男らしさの病に囚われ、いろいろ奪われて暴力的競争的になっている。それは、悲しいことであり、まともな人間になるという権利を奪われているのだという理解。

もちろん、確認のために言うておくと、「一面的断罪では浅すぎる」「加害者側のしんどさ、抑圧されている面をみる」ということは、加害者側の責任を免罪したり、居直らせるために言うているのではない。個にもどって、自分はどんな生き方がしたいのかを深くみるという、本当に必要なことをお互いがすすめるために述べている。自分自身が抑圧され、狭くされ、感じる力、優しい気持ちを奪われている、ということの本気で、「自分の痛み」と分かることこそが、必要である。自分が抑圧された結果、人を抑圧している。鈍感になっている。その気付きは、苦しいものである。スピリチュアルな水準の覚醒にいたってこそ、それは、痛く苦しいこととなる。

差別者を一面的に非難しないという、こうした深みのある人間理解は、同時にその裏返しとして、人をある一面だけで見くびらない、見切らないという態度にも繋がる。人には弱い部分やダメな部分もあるが、それでもいいところもある。頭が悪いとか、「ただの普通の人」とか見くびるような者には、人権論がわかっていない。目の前の人に、何かしら学ぶものを見出すような人こそがまともだ。相手を哲学者と思うこと。権威的でない、能力主義的でないということが、そこに出る。自分と異なる人——異文化——を表面でなく、その深いところで理解し、尊重し、尊敬できるということが多様性であり、今日の人権論の水準だ¹⁰⁾。

人を多面的に捉える、多様性において捉えるとはそういうことだろう。そうした隠れた面、深い面があり、多面性ある自分が、一面的に評価される悔しさと憤り。その感覚に至ったとき、例えば障害者が、あるいは女性が、同性愛者が、自分の多様な構成要素のうち一部だけで人から評価され決めつけられることのおかしさに思い至る（ステレオタイプでみられ優劣をつけられるという理不尽）。他の誰でもない個性ある人間、多面的でトータルな人間と見られていないことのひどさこそが、差別論の鍵だとわかる。〈たましい〉で、リスペクトの気持ちで、人をみていないことが問題なのだ。複雑で多面的な僕は誰にも完全には理解されない。「理解され、決めつけられ

10) 森田氏は言う。文化は、氷山のようなもので、認知しやすい水面上の、言語や宗教の形式や生活様式のほかに、認知しにくい水面下の、信念、信仰、倫理観、世界観、清潔感、死生観、帰属感、伝統、歴史の中で培われたプライドとトラウマなどからなる。両者は繋がっており、水面下がとても大きく、文化の多様性を認めること（人間の相互理解や共存）は文化の表面的な部分だけでなく、深層部分を含めて考えないとダメだと。

てたまるか！」という思いが各人にあることを尊重するというのが、僕の思う人権論だ。

人権論がきれいごとで浅く理解されている今日、僕たちは、まさに自分の問題——エンパワメント視点からみて抑圧されており、また他者を抑圧しているという意味で自分の問題——として捉えることが必要だ。それがエンパワメントと多様性概念の意味である。

多様性ルールの4側面

まとめとして、「多様性」をどう考えるかをのべておこう。多様性は、単に、好き勝手なことを言いうAさんもBさんもいればいい、無交流でいい、「迷惑かけてないから、私の勝手でしょ」ということではない。

元気になるためには、人には自分の物語、幻想が必要だから、自分の考えがあるのはいい。だから他人を自分の幻想に巻き込まない限り、自分が元気になるのはよいとはいえる。いろんな考えの人がいていい。ここでまず確認できる点は、意見の違いに慣れるということであり、他人に自分の価値を正義として押しつけるなということだ。(違いの尊重：消極的な意味での多様性ルールの第1点)。シングル単位論で繰り返し強調していたように、人は異なる。人間としてこうあるべきだというスタイルで、私を強制するな。共同体という幻想を押し付けるな。理解などほとんどしあえない。その中でまずは、認め合いながら共存していくこと。どこでも認められない自分の鬱憤を、身近な人に「正論」のように垂れ流すことの愚かさ、繊細に気づくような水準にならなければ、人権運動に未来はない。

なお、この1点目のルールの理解は、「迷惑かけてないからいいじゃん。それぞれの勝手でしょ」ということと同じではない。「シングル単位論は自己中心的」だという批判があるが、それは、ここで述べた「違いの尊重」と「何しても私の勝手」とを混同しているからである。そこを明確にするために、多様性理解の以下の3側面も付け加えて理解しなくてはならない。

図表—1 多様性ルールの4側面

- 1 違いの尊重
- 2 あらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく概念
- 3 尊敬を持った理解の努力
- 4 微細な権力への感性と沈黙の尊重

その2点目のルールとしては、先述した、あらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく概念だということである。差別や抑圧がいっぱいあるのに、それを放置して、口先だけできれいに、認め合ひましょう、何をしても自由というのは欺瞞である。どれもが対等に選べる、どれもが対等に扱われるには、それ以前の差別秩序を解体しなくてはならない。異性愛結婚だけを優遇しておいて、また自分がその制度に乗っかって利益を得ておきながら、同性愛もいいよね、結婚しないのもいいよねなどというのは、欺瞞だ。それは多様性の尊重とは言わない。

多様性ルールの第3点は、より積極的に、「心をこめて聴く」ということを中心におくコミュニケーションに支えられる概念だということである。異なることを大事にしつつ、それを無交流や対立のままにするのではなく、相互の成長と創造につなげることである（尊敬をもった理解の努力：多様性ルールの第3点）。

自分と違う人（他の文化、価値観、宗教、異性、異なるセクシャリティ）を深く理解しようとすることは、それへの尊敬をもたらす¹¹⁾。表面的にみて、相手を見切ったつもりになるのは簡単だ。だが、どんなものでも深く知れば、それなりに長い歴史に裏打ちされたものや、複雑さや、深遠な思考や自分とは異なる面白い世界観（発見）を内包しているものだ。そうしたことができてこそ、交流は面白い（違いを楽しむ）。そうできてこそ、きれいごとで「差別がいけない」でなく、本心から異質なものを尊重できる。先に「あらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく概念」が多様性だと述べたが、その「解体」とは、ここでいう異質なものを尊重することを意味する。

そして自分と違うものを深く知ることが、実は、自分をより深く知ることとなる。そうして相互が影響をうけて変化する。固定的にならずに変化を受け入れる柔軟さをもつこと。わからない他者だからこそ、聴かなくてはならない。理解しようと努力しなくてはならない。異なったものが聴きあうというルールの上で、対話することができれば、それはより積極的だ¹²⁾。

最後に、特に、今ここでの権力関係と戦うことと、沈黙（静かさ、弱さ、喪失）の

11) 異文化を、観察、干渉、研究、支配、指導の対象として扱うのではなく、主体的に、深く関わる喜びと苦痛を共有することがもとめられる。森田 [2000] 参照。

12) 多様性を生きるということは、個人も組織も新たな経験に心を開き、不断に変化していくということであり、それこそが本当の学びだと、森田氏は言う。

大切さに気づくことを、多様性ルールの第4点として強調しておきたい（**微細な権力への感性と沈黙の尊重**）。ブッシュ的な「力の発想」への違和感をおしすすめることこそ、人権とか民主主義とか平和といった概念に共感する人が、真に求めているものだ。人権と口で言うだけでそこで止まっているのは、途中でしかない。「権力、資本主義的搾取、暴力」と一番対抗的なものは、もちろん「勇ましい言葉」などではなく、**くたましい**の水準で生きることだ。それに近づく道が、沈黙の時間、弱さや喪失を大切にすることだ。言い切って、闘って、非難することは、「力の世界」にまだ巻き込まれている。同じ土俵だ。それは、近代主義的であり、「男性原理」的であり、暴力主義的だ。対等に付き合っているつもりでも、人の話を聞いているつもりでも、知らぬ間に支配関係、パワーゲームに入っていることは多い。

それに対して、真の非暴力主義は、もっとも「権力的なもの」に対抗的という意味で強い。自分を振り返れば、自分自身が、先進国にいて、環境破壊の一翼を担い、差別に鈍感で、不完全だ。それを見つめつつ、どのようにしていくかを考えつづけることにしか、可能性はない。その困難さをまえにしたとき、沈黙し、「弱さ」に耳をそばだて、心を寄せて、その場での小さなしかし適切な行動を選択することは、新しい可能性をひろげていこう。その現場現場での隠された権力関係を見抜き、それを少しでも減らす瞬間瞬間の選択こそ、できうる最大の実践のひとつだ。その意味で、沈黙の場の権利とそこでの権力性を減らすといった、**スピ・シン主義**的な姿勢こそ、多様性概念を豊かにしていくとても大切な点である。

社会運動の目標は、そうしたレベルの「多様性の能力（多様性受容力）」「スピリチュアルな人権感覚」を個人と組織・社会のうちにもたらすことなのであって¹³⁾、自己満足的に非難の声や啓蒙的言辞を発して、多様性意識の成熟プロセスの足を引っ張ることではない。人権という社会的なことに対し、「人権＝多様性」をシングル単位的に捉え、スピリチュアルなレベルで実践的に取り組むこと。それが**スピリチュアル**

13) 人権意識運動は、多様性受容力・多様性のビジョン（多様性を求め合う意識）を個人と組織のうちにもたらすこと、多様な人々が網の目のようにつながる多様性意識のネットワークを張り巡らすこと、と森田ゆり氏はいう。彼女がいう「多様性受容力」とは、多文化環境が要求する変化へのチャレンジを受け入れる能力のことであり、本人の「変化への意欲」を原動力とし、気付き、知識、スキルの3つの領域をもった能力のこと。森田 [2000] p 42 他

・シングル主義>の展開のひとつである。

II 人間の成熟と孤独

人間の成長・成熟にはある程度の段階があると思う。人って、「孤独」ということをどれくらい受け入れるかってことでその成熟度がわかるんじゃないかと思う。シングル単位論は、そこを意識して人間関係の距離のとり方について考えてきたものだが、トランスパーソナル心理学の本などを読んでいて触発された点も加えてくスピ・シングル主義>が捉える「人間の成長・成熟と孤独」について整理しておきたい。

トランスパーソナル心理学では、意識の変容（心の成長）段階を、「プレパーソナル」（個としての自分を確立する以前，他者との境界なし，幼児の未分化な意識状態，依存）⇒「パーソナル」（個としての自分を確立した状態，他者との境界確立，自我と理性，独立）⇒「トランスパーソナル」（個を確立した後にそれを超えていく段階，境界の超越，相互依存，宇宙との一体など悟りの段階）という図式で見る。

それにヒントを得て、僕なりに人間成長の4段階というものをえがいてみる。

II-1 <孤独>を受け入れられない段階

第1段階 プレ自立の段階

まずもっとも人間として幼い「プレ自立の段階」というものがある。これは、「わたしはあなた，あなたはわたし」というように，自分の個性・個別性に無自覚で，「自分と他者・集団の区別が不明確な」混沌とした段階であり，共同体との融合状態こそ幸せと信じ込んでいる状態である。したがって，私のことをすべてわかってくれて当然というように，自分中心に考え，人に依存的になったり逆に抑圧的になってもそれを悪いと思わない段階である。日本人の多くは歴史的文化的背景もあっていまだここに属する。シングル単位論で，家族単位の問題として指摘したのは，この段階の状況であった。

もう少し詳しく言うと，みんな一緒が嬉しい，一人は寂しいなーと思い，結婚したり恋人ができたり家族がいたり友達がいると，自分のことがわかってもらえて，愛されて，不安はなくなり，寂しくなくなり，シアワセになれると思込でる段階。恋愛・結婚したい，結婚・恋愛しないとダメ，結婚・恋愛さえすれば幸せになれるとい

う思い込みに囚われている段階。寂しい、家族がほしい、子どもがほしい、「親友、何でも受け入れる人」がほしい、幸せになりたい、幸せにしてほしいというような受身の姿勢である¹⁴⁾。

みな同じ、みんなと一緒に、共同体になりたい、そうでないと不安となるのは、人は各人それぞれ異なり他者であるということがわかっていないからである。何らかの共同体に、よく煮たカレーの具のように自分も溶け込んで、アー気持ちいいって思えるのがよいことと信じ込んで。人生最大のイベントは結婚などと平気でいう。「結婚式に来てー」「あなたも早く結婚したらいいよ」「一生愛するよ」、「一生親友よ」などと平気で言える。結婚式に人がいっぱい来てくれたら自分は愛されていると思える。

でも、そういう人は、ある一時期、幸せと思えても、別のある時期は、親しい人と喧嘩したり、自分の気持ちがわかってもらえなかったりするから、どうしてなんだーと怒ったり失望したりする。人は理解しあえるはず、一体だ、ということを前提にしているので、そうならないとわかったときうろたえる。少しでも理解しあえないとか、違う考え方だとわかると、ガーン、不幸だ、どうしようとなる。「私の思い通りになってくれない（わかってくれない）なんて、私のこと愛してないんだ」「私の期待に応えてくれないからあなたのこと嫌い」「他の人を好きになるなんて裏切りだ」となる。蜜月一体関係が終わると、修羅場の争い関係、憎悪・嫌悪関係になる。

相手を自分の幸せの手段視しているのに、そのことに自覚的でない。もっと自分を幸せにしてくれる人を求め、自分は不幸だと嘆く。そうして次々に友達や恋人を変えたり、家族を非難したりする¹⁵⁾。「理想状態じゃない、理想の相手がいない」という

14) ある有名タレントの自伝では、若いとき「不良仲間」とカツアゲしていても、そのこと自体を悪いと思わず、むしろ寂しいときに寂しさをやわらげてくれるげらげら笑いあえる仲間だったというようなふり返りがある。そして主人公である本人は、親や周りの人への不信感もち、誰も自分の気持ちなんかわかってくれないと嘆き、それを埋めるために、恋人や家族の「愛」という青い鳥ばかりを追い求め、表面的な「愛」にすがって同じ過ちを繰り返している。カツアゲされる人の痛みに思いが至らないような「愛」とは何か。「愛」ばかりいってる人は、寂しい人である。

15) ある新聞に載っていた例。いい感じの人に会えばメールを送って付き合ってセックス。好きになったほうが負けと思っている。遊ばれる前に遊び返してやる。長く付き合えない。うまくいけばすぐに別のオトコに乗り換える。「今何してる？」とメールを打ちまくる。けれどいつも満たされない。心から満足するような、心身が気持ちいいセックスじゃなく、義務的せつな的なセックスをして引きとめている。楽しいデートと

不安定感・不幸感を持っている。自分をわかってくれる人、素晴らしい共同体といった「青い鳥」がどこかにいるはずと思っている。

こういう段階の人は、＜孤独＞と「距離感のある関係」が嫌いだ。理想状態の逆だと思っている。孤独をあたりまえの状況とっていない。親しい人との距離を大切にできない。いつも寂しい、寂しいと嘆いている。そして寂しいからと、ともだちや恋人や家族という「群れ」に入って孤独という寂しさから逃げようとしている。自分の価値観への相対視がないので、孤独な人を勝手に哀れむ。そしていったん、家族や恋人や友だちになったら、「他人としての適度な距離感」をなくして、距離ゼロにして、一挙に甘えたり役割を押し付けて当然と鈍感になる。嫉妬、しがみつきの干渉などを平気でする。悪いとおもっていない。「相手を縛ること、嫉妬すること」が愛情の表れだと思い込んでいる。秘密やプライバシーがないことが仲のいいことと思っている。相手が距離をとったり、秘密を持ったりすると怒る。自分で努力し自立し自己決定し責任をとることから逃げて、人に依存したりする。「人は弱いからそれでいいじゃないか」といったりする。「……してやる（してあげる）」というようなことに平気になる。

だからこの段階の人は、何かの依存症になったり、共依存関係に陥ったり、「だめんず」（暴力男など）¹⁶⁾ になったり、その「だめんず」から離れられなくなったりもしやすい。その意味で、愛と支配が絡み合っている段階の人といえる。次の「孤独を受け入れる自立の段階」に至っていないがゆえに、トラブルを抱えている状況の人が日本には多いので、このプレ自立段階への批判性が求められていると思う（それが家族単位批判）。

不安ゆえのしがみつきの

日ごろそんなに仲がよくないのに、「私のこと好き？」と聞ける人がいる。この質

いうよりセックスのためだけのデート。ともだちに彼氏を見せたい、いないと寂しい、という感情もあるが、でもいても寂しい。深く愛せない。だから彼氏はブランド品と同じ。

この彼女を特殊例外だとはいえない。程度問題の人は多い。

- 16) 働かない、人をなぐる、女をだます、嘘をついて金をせびる、といったようなダメな男たちを「だめんず」と呼び、そんな男をどうしても追いかけてしまうダメ女を「だめんず・うおーかー」とする。倉田真由美 [2001] 『だめんず・うおーかー』。

問が「好き」という答えを強制しているということにさえ鈍感な人だから聞けるのだろう。僕の友人は、「その質問で好きと答えをもらって、信じられるのか」という。そんな言葉をもらっても意味ないじゃないかと。動作や表情で本物は伝わるはず。表面の言葉がどうあれ、それ自体では内心などわからない。不安だから聞くのだろうが、聞いても不安が解消されるものでもないはずだ。表面の言葉の文言自体は無限に信じられないものであり、結局、自分で総合的に態度や言葉の全体から関係性を感じ取るしかないものなのだ。だからその友人は、その質問に答えないという。ステキな人だ。まともだ。

「私のこと好き？」という人、つまりプレ自立段階の人は、なぜ自分がそういう質問をしてしまうのかを見つめる必要がある。好かれないから人に優しくしようとするのか。「嫌われないために、優しくする」とおもっていないか。条件付きか。取引か。なんて表面的なのだろう。好きと答えたら仲間、こっちも好きになってあげる、そうじゃないと不安で「敵」にする。好きになってやらない。仲間か敵かを区別し、誰かをスケープゴートにして、こっち側の集団の団結力を高め、その集団に属していることで安心を得ようとしているのではないか。それはいじめやナショナリズムの排他主義と同じ構図ではないのか。だが、「私のこと好き？」といえる人は、その言葉の背景の意味に気づこうともしていないのだろう。

昔あるドラマで、「そこに愛はあるのかい」というセリフがあったが、拡大解釈するなら、その言葉や行動に本物のスピリチュアルなものがあるかどうかが大変なことだろう。表面的な「好き」という言葉でなく、〈たましい〉が交流していれば、そこには不安はない。だが、日本人は横並び意識が強く、孤立を恐れ、他者と争いたくないといって、その人の前ではテキトーに取り繕って笑顔を作って、裏で文句や悪口をぶちぶち言うなんていう人（プレ自立段階の行動の人）が多い。だが、僕が好きになる人は皆、そういう多数派グループに入って自己保身することを嫌い、孤立・孤独を選択する人だ。自己保身とか浅い安心のために、簡単に思ってもいない「好き」という返事をしてしまうこと（「離れないで」と言うようなこと）に、敏感に異臭を嗅ぎ取るセンスにこそ希望がある。なぜ、孤独でいられるのか。それは自分にはくたましい〉が見えているからだ。

実際はつまらぬトラブルを避けるための方便もあっていいとおもうが、鈍感に「私のこと好き？」と聞いたり、それに簡単に合わせてその人にこびるようなことをいっ

たりしないような、深い生き方をしたいと思う。それが、プレ自立段階を脱出するということだと思う。

プレ自立段階の人に欠けているもの

カウンセリングでは、自分というものを深く知り、それをベースに適切に相手とコミュニケーションする能力を高めることを目指す。それが人間関係で大切なことなのだが、プレ自立段階の人はこれできていないとみることができる。それをカウンセリング論の言葉を用いて、もう少し詳しく整理しておこう¹⁷⁾。

標準的なカウンセリング論¹⁸⁾では、まず自分に向き合い、自己というものを知り、自分に自信をもつことを大事にする（自己認識・自己肯定）。それがあれば、他人の評価に左右されすぎず、失敗に過度に囚われず、自分に対して寛容になれ、安定する。

次に、自分の考えを明確にもち、適切に伝えること（表現）や自分の感情を適切に把握しコントロールできることを求める。ここには、自分の感情の伝えるものを適切に受け止める能力も含まれるだろう。また、防衛的閉鎖的にならずに自分を相手にオープンに正直に開示できること（自己開示）も大事だとみる。自分を開示できてこそ、相手も開示してくれるものである。弱みを見せるということは、双方が安心するために必要なことなのである。

さらに、よく聴くこと（傾聴）がとても大切で、聴いてもらえるという経験・雰囲気は人をくつろがせ、受容されているという安心感をもたらす。そのためには、聴く側の内面が明確でないとダメである。〈たましい〉という感覚をわかっていると、介入や指導でなく、受容的に深く聴けるのである。そして最後に、聴く側は、相手との関係に対して誠実で、深い意味のある結びつきを作り上げようとする、つまりスピリチュアルな交流をしようとしていることが必要である。

こうしたまともなカウンセリングがめざす諸能力を適切にもっていない人は多い。

17) 黒木賢一氏の講義資料をベースにまとめた。

18) 現在行われているカウンセリングというものの自体への批判の視点を踏まえた上で、「良質なカウンセリング的なもの」の特徴をここでは述べている。「心の専門家」と称する高度な専門性を持った専門家がカウンセリングを行うべきとする姿勢についての適切な批判は、小沢 [2002] が詳しい。私は基本的に、皆がまともなカウンセラーの能力をもてるようにすべきであると考えている。

人は誰でも未完成で不完全だから多かれ少なかれ不十分であるのは仕方ないが¹⁹⁾、ここに挙げた能力・スキルが不十分であるということを実感して、したがって向上しようとせず、居直ったりそれでいいのだと思っていると、個人としても社会としてもとても困ったことになる。

例えば、「自分がない、自分を知らない、自己認識がない、客観的に自分を捉えていない」と劣等感と恐怖感をもち、自分を責め、他者を責め、人の言動もゆがめて受け取りがちになる。周りに振り回され、自分の失敗に囚われすぎてしまい、他人の評価を気にしすぎ、そのため余計に萎縮してしまいうまくいかなくなる。完全な自分を求めすぎてしまうのである。

自信がないと、依存的・他律（非自律）的になり、コミュニケーションが消極的になったり、「わかってくれるはずだ」との思い込みに囚われて適切に表現しなかったり、怒りやすくなったりする。「こんなことを言うと嫌われる」と思って自己表現を抑制することもあるだろう。

逆に適切な自己認識ができていず、過剰な自己への自信をもってしまうと、独りよがり、反省なし、他の人を見下してしまうというタイプになる。

適切に表現する能力がないと、自分の思いが伝わらないので、いらいらし、相手に何でわかってくれないと不信感をもち、自信喪失・自己否定的になる。結局適切な関係を作れなくなる。

感情を適切にコントロールできない人は、無理やり抑えすぎて、憂鬱、くよくよ、いらいらし、自己否定し、結局いつかどこかで爆発してしまう。感情を出しすぎる人は、自分の感情に飲み込まれ（巻き込まれ）、また相手の感情にも弱く、結局感情のコントロールがきかずにあちこちでトラブルを起こしてしまったり、感情に翻弄されてしまう。穏やかで公正な人になれない。適切に相手との関係を築けない。これもまた自己否定的な気持ちにつながる。感情に向き合わない人は、感情が伝えようとするものを見逃す鈍感な人になり、自分も他者も大事にできないだろう。

自己開示できない人（自分の弱みを見せられない人）は、相手も打ち解けず自己開示せず、関係が固くなる。こういう人は、無意識のうちに自分の弱みを隠し、評価を

19) 例えば僕は、自己開示も不十分だし、感情との付き合いも苦手だ。よく知らない人でも、もっと気楽に話したり、うれしさの感情をはっきりと出せるようになりたいとおもう。

恐れているのであり、自分や相手の失敗に寛容的でない人となっているだろう。人間関係に恐怖心を持ち、自分に自信なく、相手に不信感があるから自己開示できないのであるが、そうと気づこうとしていないのである。逆に弱みを見せることは負けだ、逃げだと思っている。だから「弱音を吐きたくない」という人、多いよね。

もちろん、この逆の過剰な自己開示も困りものだ。それは、過剰な依存であり、相手の迷惑を考えもしない、自己中心的表現にすぎないから。ずうずうしい押し付けは、相手をつぶすし、しばしば、相手の自己開示を抑制してしまう。

「深い関係を創ろうとせず、表面的関係で済ます」のは、関係から逃げているのだが、さらには、他者に不信感を持ち、自分が傷つくことを恐れ、人や自分が変化することを信じられないから、正直に誠実に深く付き合おうとしていないということだと思う。これは、深い関係の快樂を逃すことになる。しばしばシングル単位論は冷たいといわれるが、適度な距離感をもつということは何もくたましいの深い交流を妨げるものではない。べたーと依存的に「単位化」することと、そうでない適度な距離をもちながらのスピリチュアルな関係との区別があるのである。

さらに、傾聴しない人は、相手の気持ちや考えを正確に把握せず、決めつけてしまう傾向をもってしまう。相手の感情をつかみにくいし、相手に肯定的関心をもちにくくなる。傾聴するに値しないと無意識に決めつけているのだ。それは結局、攻撃的で、自己中心な態度だ。

プレ自立段階とは、以上述べたような、様々な欠点をもっているということである。だからそこに居直ってはいけない。単位＝共同体に逃げ込んではいけない。だが、こうしたことが適切に研修されていない。だからプレ自立段階の問題が日本中に噴出している。

第1段階の亜流

この「プレ自立段階」の基本型が、自分と他者が一体になって幸せになれると、世間の共同体的価値観に楽観的に浸っている状況とすると、それと似た3つの亜流がある。

その一つは、共同体（一体となること、距離ゼロ）こそ素晴らしいと思っており、孤独ということを受け入れておらず、その意味で集団共同体に期待しているが、現実にはそんな共同体はないので、人を信じられず、理解しあうこともできず、だから他

人に心を許さないで、寂しさを抱えている悲観的な状態である。愛を期待しながら、愛を諦め、他人を憎み、しらけていたり敵対的であったりする。自分の世界に閉じこもり、自分勝手になり、悪い意味で「こもった孤独」「閉じた孤独」になっている。こういうのも、殺伐とした今の日本では多い。共同体幻想がうまくいかなかった経験から、次の第2の「自立段階」に至らずに、共同幻想から離脱できないまま「裏切られた」「人間なんて信じられねえ」とだけ思っただけで行き詰まっているのだ。

2つめの亜流は、ある種、「良心的」なもので、共同体主義だが、家族、他者、仲間、国家、公のために、自分が尽くす（自己を犠牲にする）というかたちで、つながりを大事にするものである。そこには美しいエネルギーもあるが、ファシズムや全体主義、ナショナリズムという排他的なやばいものになる場合もある。

3つ目の亜流は、若者に多く見られる、「好かれたい、目立ちたい」という願望である。「共同体主義」の自他の区分が曖昧なところや共同体からの承認が重要という性質が、「皆から、好かれていない、嫌われている、忘れられている、無視されている、見られていない」というのはダメ、だから、みんなに好かれたい、印象に残りたい、目立ちたい、覚えていてほしい、見てほしいという感情になっている。そして好かれている人や目立つ人への強い嫉妬の感情になったりする。人目を気にしすぎて、自分を肯定する自分の視点がないつまり、エンパワメントできていないのだ。

だから、そうした「好かれたい、目立ちたい」という感情は、人を押しつけてでも頂点に立つというようなものじゃなく、逆に共同体の調和を乱さない範囲という条件付きだ。人に攻撃されないように、皆に愛されるように、かわいくあろうとする。派手で目立ちすぎても、暗くておとなしすぎても、皆の攻撃を受けるから、それは避ける。過剰に、「自分が人からどう思われているか」を気にし、学校や仲間関係で友達に気を使い、「友達にシカト（無視）され」ないようにする。本音を語らず、上っ面の付き合いをする。そのようなバランスを保ちながら、目立ちたい、好かれたいと、もがいている。

11-2 <孤独>を基礎とするつながりへ

第2段階 孤独を受け入れる自立の段階（狭義シングル単位段階）

人間の成長・成熟の第2段階は、個としての「自分」を確立し、孤独を受け入れる自立の段階である。人間各人には個別性があると自覚し、他者は、自分には容易には

理解できない、分かり合えない、他者と私は一体ではない、過度に他者に依存してはならない、＜孤独＞が基本であると自覚する段階、すなわち共同体への幻想から脱する段階である。狭義シングル単位論はここを強調していた。

もう少し詳しくみていこう。子どもが成長すると自分と親、自分と他者の区分別々に分かってくる。それを本格的に人間関係に適應できれば、それはかなり成熟したことになるのだが、日本では大人になっても「わたしはわたし、あなたはあなた」と本当に思っている人は少ない。言い換えれば、ジェンダーや会社・農村共同体、民族意識、慣習等に、多かれ少なかれ、共同体幻想は利用されてきたので、それらから離脱して「個というもの」を確立するのは難しいのだ。それは自分の文化が歴史的にひきずってきたものを解体する面があるので、容易ではない。

で、シングル単位論は考えた。そもそも、孤独って悪いものなのか？なぜ？なぜイヤなのか？「結婚していないとダメ、恋人や友人がいないとダメ」って思ってるから、それを基準に、孤独を恐れてるんじゃないのか？ 独身とか離婚したこととか、同性愛とか、子どもがいないこととかは、本当にそんなに、万人にとって絶対的に寂しくてつらくて、避けるべきことなのか。絶対的にダメなんじゃなくて、第1の「プレ自立段階」から見て、孤独を恐れているだけじゃないのか。つまり転倒しているだけ。お化けがいるとおもって、お化けを怖がっているのと同じじゃないのか。シングル単位論的にいえば、家族単位のシステムが「個の自立」を阻んで「個はダメだ」と洗脳しているんじゃないのか。

「プレ自立段階」の「愛されなくっちゃ、幸せになれない」という切羽詰った強迫的気持ち自体に隠れているのは、小さいころからの生育過程のどこかで身に染み付いた、心の不安定感だと思う。その不安定感自体を深く見つめなおすことなしに、共同体の形にしがみつくとのは、結局、不幸なままだ。受身でどこかの共同体に入れば幸せになれると思っている限り、安定した幸せ感は何も得られない。それよりも、人は個別的な存在なのだから、まず人は＜孤独＞から始まる（＜孤独＞はあたりまえ）と思ったほうがいい。それは何も、人を切り捨てたり、嫌いになったり、信じなかったりするということじゃない。他人との関係の前に、まず、自分というものを肯定する力をもつということである。

愛されてないから、人から寂しいやつだと見られると思ってあせるのでなく、もっと孤独でいいのだ、スペシャルな感覚があう人が少数いればいい、自分で自分が肯定

できていればいいという感覚。

「ゲシュタルトの祈り」²⁰⁾が「(略)……わたしはわたしのことをやり、あなたはあなたのことをやる。／わたしはあなたの期待に応えるためにこの世に生きているわけではない。／あなたはわたしの期待に応えるためにこの世に生きているわけではない。(略)」というように、まず僕たちは、「自分は自分でいい。人目や世間体なんて気にしない。私は自己を犠牲にしない」という地点から自立を出発すべきなのだ。「ゲシュタルトの祈り」を聞いて「冷たい、寂しい、いやだ」と思う人は、第1の「プレ自立段階」にいるということである。人間が成熟すると、「ゲシュタルトの祈り」でいうことはもっともであり、悲しいとか冷たいということにはならない。

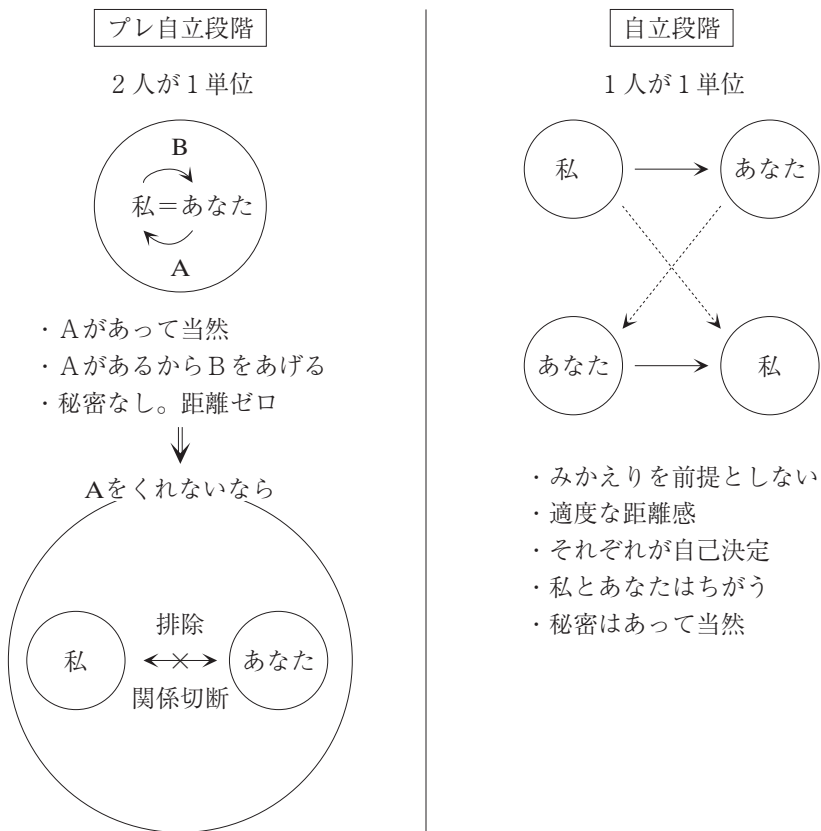
人よりも成績がいいとか悪いとか、きれいとかか、金持ちとかか、愛してくれる人の多さとか、そんなふうには比べて優越感をもたないと幸せになれないという発想から脱することが重要ってことが、個として自分を確立するということだ。そうしてこそ、見下されたり、手下にされたり、虐げられることに抵抗する力がつく。集団から排除されてもいいと思えてこそ、人は自尊心を持てる。

諸富祥彦さんは『孤独であるためのレッスン』（諸富 [2001]）で、充実した孤独を受け入れるためには、人間関係についてのゆがんだ思い込みやこだわりを気づくことや、「わかり合えない人とは、わかり合えないままでいい」と認める勇気をもつことが大事という。これも同じことを言っている。自分の共同体主義的な囚われ、「プレ自立段階」への批判的自覚があつてこそ、第2段階へ成長できる。

「私の期待どおりになってくれないから、あなたのことが嫌い」というように、自分中心で条件づけて関係を考えるのではなく、私の判断で私はあなたが好きだから、あなたが私の期待に応えるかどうかという条件付けなどせずに私は自分の主張をする、というのが、自立した人間どおしの関係に向かうときの基本だ。つまりベクトルが私を出発点にあなたに向いている。単位は、「個」である。第1の「プレ自立段階」では、私とあなたは一体（単位は2人という共同体全体）なので、ベクトル自体がないのだ。そこでは、図に示したように、Aという与えてくれるものがなければ、「私」は「あなた」を共同体から排除し、関係を切断する。つまり、「あなたと私は一体、

20) ゲシュタルトセラピーの創始者として、1960年代に、米国で流行したヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントで中心的役割を果たしたフレデリック・パールズの有名な言葉。あちこちで紹介されている。諸富 [2001] p 98

図表-2 自立と孤独



無私の愛」という美しい言葉に反して、事実上、見返りを求めている愛であり、仲間じゃなければ排除する愛なのだ。

この「孤独を受け入れる自立」の段階は、多様性概念を検討したところでまとめた、「多様性のルール」の1点目（違いの尊重）におおむね対応しているといえる。「プレ自立」段階は、多様性を認めない段階である。お互いが違う、わたしの期待通りでなくていい、ということを受け合るところから、まともな関係は始まる。

また、これまでの人権擁護関連の諸運動のうち、意見の違いを尊重し、個を尊重する草の根運動の良質なものの多くは、このレベルに対応する。

ただし、この「孤独を受け入れる自立」段階で必要十分の成熟・成長だとはいえない。還言すれば、この段階には限界・マイナス面がある。それは狭義シングル単位論の一面の不十分点にも関わっている。つまり、孤独や自立や個性は大事だが、それだ

け言って、共同体や人のつながりに批判的であるだけだと、自分中心の能力主義との区分が明確にならないという点である。一步間違うと、人を信じられず、理解しあうこともできず、だから他人に心を許さないで、寂しさを抱えている状態になる。他人に無関心となり、他人などどうでもいい、人間不信、心を開いたら損と思い、表面的に適当に付き合い、本心では相手を自分の利益のために利用するだけ（エゴイズム）となる。

もちろん、シングル単位論も、ここでいう「自立段階」もそんな意味じゃない。個の確立、自立があるからこそ、「プレ自立」段階の「抑圧的愛」ではない、相手を所有したり抑圧しない「愛のようなもの」が可能だということを僕は、シングル単位論として主張してきた。それを明確にするためにも、シングル単位論の射程を広げ、「個」がどう繋がるかを明確にしていく必要がある。それが熟成していくと以下、第3、第4の成長段階、＜スピ・シン主義＞に対応した段階となると思う。

なお、宮台真司さんの「まったく若者でいいじゃないか」という主張を僕は、＜スピ・シン主義＞のレベルから批判しているが、「プレ自立段階」から発展して「自立段階」に至る過程としてはOKだと思っている。日本の共同体主義批判の点で、僕は宮台さんのオヤジ批判を全面的に支持する。

第3段階 スピリチュアルなつながりという、初級＜スピ・シン主義＞段階（広義シングル単位論）

人間の成長・成熟の第3段階は、＜孤独＞を受け入れた自立した個人（シングル単位人間）が、＜孤独＞と他者との距離感を尊重しつつ、自分をエンパワメントすることで、他者を尊敬し、差異を楽しみ、多様性を実行し、スピリチュアルな視点をもって繋がっていきける段階である。

この成長・成熟段階で重要な点は、人間存在をホリスティックなものとして、とくにその中のきれいな聖なる部分、つまり＜たましい＞において、人が「他者、全体」とつながれるということに気づいているというところにある。「わたしはわたし、あなたはあなたであるが、わたしとあなたは＜たましい＞でつながっている。その意味で、わたしはわたしでありながら、同時にあなたでもある」という認識である。このスピリチュアルな視点は、本当に大切なものはなにかという問い、「死」「喪失体験」というようなくぎりぎり＜＞に触れることで遭遇するものである。そしていったん、そ

図表-3 「自立段階=魅力的な人」と「プレ自立段階=囚われている人」
(エンパワメントできている人とできていない人)

魅力的な人	VS	囚われている人
<p>エンパワメントできている人</p> <p>安心, 自信, 自由</p> <p>他者の目・評価が気にならない 優越せずとも勝利しなくても自己肯定できる 劣等感に囚われない 自分を肯定する 愛する人を大切にする</p> <p>微笑んでいる 孤独になれる (孤独力) 自分で立てる 依存しない 支配しない・支配されない バカな奴から離れる力 (孤独力) がある 自分で決める。それがしんどくても自分で決める 人の話を心こめて聞く</p> <p>本を読む 話の引き出し一杯 話をして魅力的 いろんなことを見えている ひとのために何かできる (している) <たましい>を感じられる 30, 40, 50歳, 60歳, ……といつでもそのときが大事 希望があり, 人をうらやまない 何歳でも選択肢を考えている</p> <p>外見は一部でしかない, 自分なりのファッション・スタイルを追求 恋愛・恋人のこと以外にも関心あり 目標をもって生きている</p> <p>「だめんず」にならない 「だめんず」を好きにならない</p>		<p>ノン・エンパワメントの人</p> <p>安心も自信も自由もない 力を奪われている 他者の目が気になる 優越感や勝利の感覚でしか自己肯定できない 劣等感に囚われる 自分を否定する 愛する人をひどく扱う 引きつった余裕のない顔 孤独になれない (孤独に弱い) 自分で立てない 依存する 支配したりされたり バカな奴から離れられない 自分で決められない しんどいことから逃げる 人の話を聞かない あせっている 喧嘩する いらだたせる 本を読まない 話の引き出し少ない 話をしていてもおもしろくない いろんなことを見えていない ひとのために何かできない (していない) <たましい>を感じられない 若さだけが大事と思っている</p> <p>希望がなく, 人をうらやんでばかり 歳をとったからもう無理と諦め, 嘆いている</p> <p>外見・外目だけに関心 流行追随 ええカッコしい 恋愛・恋人のこと以外に関心なし 目標なくだらだら生きている 会社人間と同じ 「だめんず」になる 「だめんず」を好きになる</p>

れが見えると、路上でもどこでも、瞬間的出会いの質を大切にすれば寂しくない、むしろ感謝できるということに気づけるのだ。

これは、自分を闇も含めて深く知り、それによって他者の痛みを想像・共感でき、繋がれるという、エンパワメントの項で説明したことに対応している。自分の内面をみて、本当の深い欲求を見つけ、他との比較や競争からはなれて自分への自信をもつ＝エンパワメントすることで、深い自立をし、自分を肯定できるからこそ、人の能力やだめさを認められる、他者を受け入れられる、繋がれるということだ。

また、この第3段階は、自己確立の上での自己領域の拡張によるつながり意識・連帯・支えあいの段階であり、多様性のルール2,3点目（あらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく、尊敬をもった理解の努力）におおむね対応する。人は代替不可能な個性であるが、そうであるがゆえに、分かり合えないからこそ、わかろうとするための努力を行いうるのだ、そしてときどきは奇蹟のようにくたましい>を感じる交流ができるのだという希望をもてる認識段階である。

この第3段階は、ともすれば共同体の良さ、愛情の素晴らしさ＝「あなたとわたしは一体」と混同されやすい。だが、第2段階を忘れて自他の区別がなくなる忘我的状況（第1段階）へ退行することと、この第3段階の、深く自己を拡張する中で他者・全体と繋がることとは、区別されなければならない。両者は、似て非なるものであるが、その類似性を利用して、巷にはいいかげんな「スピリチュアル関連の新霊性運動的なもの」やエセ宗教などがあるので、第2の自立段階（シングル単位視点）を常に押さえておくことが大切である²¹⁾。

この第3段階は、第2段階をベースにしているので、<孤独>ということを忘れてたり恐れたりしない。つながりの中核として、<くたましい>がみえているからこそ、<孤独>がありつつ、それを平気で受け入れるのである。<孤独>でありつつ、安定した気持ちで繋がれるのである。集団から排除されようとも平気なのは、<くたましい>という確固たる信念があるからである。

その安定した強い心性は、俗っぽくいえば、「この人だけは私を見捨てないという感情」をもっているという表現に近いが、実は正確ではない。この表現は、犯罪を犯

21) したがって、この第3段階のありかたを、「相互依存」「相互干渉」というのは不適切である。依存・干渉は、自立に反する。第3段階のつながりは、依存でなく、適度な距離がありつつ静かに繋がるものである。

したりひどいことをする人でも身内なら擁護するというようなヤクザまがいの論理（第1段階の共同体主義）としてしばしば使われているからである。「見捨てるか見捨てないか」の前に、何を基準としてその人をそこまで信じたのかということこそが大事である。

この第3段階において人を信じるとは、〈たましい〉のレベルで信じられるから、その人が一見何を言おうが、どんな噂を流されようが、その底にはきつとすばらしいものがあるに違いないと思えるということである。つまり、〈たましい〉というものを基準に自分がある人から肯定されているという感覚があるとき、人は孤独に耐えられるのである。

第4段階 高次の生き方を実践するという、上級〈スピ・シン主義〉段階

人間の成長・成熟の第4段階は、支配秩序の価値観から離れ、〈たましい〉に気付いて、微笑をもって静かに生きつつ、まわりの人にスピリチュアルな影響を与えるというようように、特に人間性が高次になったレベルで生きていく段階である。第3段階が気付きと少しの実践のレベルとすれば、第4段階は、気付いてもなかなかできない実践を恒常的に生活全般に広げ、社会変革に関わる上級段階である。

この段階においては、日常の中で、日常次元を越えたスピリチュアルな次元を繊細に見分け、かすかな音を聴き、そこに対して瞬時的即興的に対応できる能力を備えていることが必要である。とくに、その実践の中に、他者や社会に〈スピ・シン主義〉的な感覚を広げ変革していくことが入っていること、言い換えれば、自己の変容と社会改革をスピリチュアルなレベルで統合していることが見出される。

また、自己の表現能力が、知性、身体性、情感性に加えて、混沌の闇世界のエネルギー表現、スピリチュアルなエネルギー表現においても伸びているというアートの人間成長段階でもある。言葉にも振る舞いにも、仕事にも作品にも、すべてスピリチュアルな力が溢れている段階である。この段階は、多様性のルール4点目（微細な権力への感性と沈黙の尊重）も含めて、すべての点で高い質で実行できている水準といえる。

この段階の人間にとって、〈孤独〉はもはや悩ましい問題などというレベルではまったくなく、逆に、深い〈孤独〉の感覚に覚醒しているという、親しみのある〈孤

独>との付き合いの段階である。ものごとを本当に深く見つめるのはすごく難しい。しかし例えばティク・ナット・ハンが求める悟りの水準とはそういうことである。どこからでもあらゆる瞬間を通じて、自分を越えた世界全体・歴史全体とのつながりにおいて「自分」を感じられ、それが生き方の芯になっているということこそが、深い<孤独>なのである。

僕はまだまだ

人生には、いくら歳をとっても、新しい選択肢がある。それが見えているか、それをする勇気があるかが大事だ。結婚したから孤独じゃないなどというもんじゃないし、<孤独>という問題とは常に係わり合い、できること（プラスの方向）はあると見えていることこそ希望だ。成熟がある、成長がある、目ざすものがあるというのは、希望だ。孤独だ、寂しいというしろ向きに諦めたり嘆くことではない。<孤独>が出発点でそれを第2, 3, 4段階のレベルで積極的要因として考えればよいのだ。

とって、僕はもちろん、完璧じゃない。僕は、上記の第1, 2, 3のレベルをウロウロしている。第4段階には至っていない。しかし目指したいと思う。プレ自立段階にとらわれているということを自己否定的に捉える必要などない。大事なことは、自分が第2, 3, 4段階に至っていない面があると知ることだ（図表-3を見れば、「囚われている人」の面に思い当たるところが多いじゃないか）。自分の段階を知ってこそ、成長はある。僕自身が、自分には第1のプレ自立の面がないと思っていたこと自体を省みて本稿があるのだ。僕はまだまだだ。矛盾していて、「とり乱し」ていていい。僕は、高い次元を求めつつ、ダメな自分を愛して取り乱しつつエンパワメントしていく人が好きだ。

参考・引用文献

- 花崎皋平 [1996] 『個人／個人を超えるもの』 岩波書店
 伊田広行 [1995] 『性差別と資本制——シングル単位社会の提唱』 啓文社
 —— [1997] 『樹木の時間——もう鼻血もでねえ』 啓文社
 —— [1998a] 『シングル単位の社会論——ジェンダー・フリーな社会へ』 世界思想社
 —— [1998b] 『シングル単位の恋愛・家族論——ジェンダー・フリーな関係へ』 世界思想社
 —— [1999] 「スピリチュアル・シングル——生き方と社会運動の新しい原理を求めて」

『大阪経大論集』50巻第1－3号

倉田真由美 [2001] 『だめんず・うおーかー』 扶桑社

森田ゆり [2000] 『多様性トレーニングガイド』 解放出版社

諸富祥彦 [2001] 『孤独であるためのレッスン』 日本放送出版協会

中野民夫 [2001] 『ワークショップ』 岩波新書

プレスプラン編集部編 [2000] 『いじめ少年犯罪に宣戦布告——史上最強の告発マニュアル』
プレスプラン

ティク・ナット・ハン 『仏の教え ビーイング・ピース』 棚橋一晃訳 中央公論新社

小沢牧子 [2002] 『「心の専門家」はいらない』 洋泉社